

1 はじめに

「〇〇さんは国語ができる」

このように人から評される方は、どのような方でしょうか。授業で生徒の方に聞いてみました。出てきた意見は、「読解力がある」「本をよく読んでいる」「ものをよく知っている」「背景をつかんでいる」「文章力がある」などなどです。どれも正解だと思います。しかし抽象的であり、学ぶ生徒の側にとっても力がついたら実感しづらい項目が並んでいます。

さらに、ここには重要な点があります。実はこれらに該当していても「国語ができる」と言われない場合があるのです。一つ、当然すぎるのにもかかわらず、見落としがちなポイントがあります。

現実問題として、国語のできる方とは「テストで点が取れる人」、しかも「安定して点の取れる人」ということになると思います。なお、出題範囲が限定されていて、授業内容を踏まえて書くことで点の取れるような、学校の定期テストは、ここでいうテストではありません。過去、解答欄を埋めてさえいけば0点とはならないという定期テストがあったと聞いたことがあります。それは「励まし」にはなっても、本人のためになるとは全く思えないと感じました。やはり、未知の文章を読み自力で正解となる解答を出すことが求められるテストを対象にして考えたいものです。

では、安定して点が取れる人とはどのような方でしょうか。逆に考えると、点が思うように取れない場合、原因はどこにあるのでしょうか。

その前に、まず国語という科目の特徴を考えておくべきだと思います。

2 「国語」のとらえ方

国語という教科はその特徴から以下の2種類に分けられると考えています。

①鑑賞の国語

「味わう国語」「感性を磨く国語」とも表現できるでしょう。実際に文章を読み、その奥に秘められたもの、すなわち行間をとらえ、味わう力を養うような国語です。

ただ、この力を養うことは教養の範疇に入り、受験に直接的に役立ちません。逆に「行間を深読みする読み方が文章の読み方なのだ」と勘違いしてしまい、得点力が安定しない状態に向かってしまう恐れもあります。子供の頃本を読むのが大好きで活字に親しんでいたにもかかわらず、中学高校で、特に大学受験において得点が取れない方は、国語について、ここでいう「鑑賞の国語」を国語の全てと考えてしまい、次にあげる②をあまり意識できない場合があるのではないかとというのが自分の意見です。

ただ、特に一貫校に通っている方にとって、中学時代は「鑑賞の国語」に親しむことも大切だと思います。大学受験には直結しないのですが、国語という科目に親しみ、言語による表現を豊かにし、ひいては精神生活を豊かにするためにも「鑑賞の国語」は重要な位置づけにある科目だと思います。グノーブルでは、中2～中3までを「鑑賞の国語」に親しむ時期と位置づけ、重視しています。

(参考)

中学2～3年の授業内で、問題文に「考察しなさい」と表現してあるものを時々設けています。これは「鑑賞の国語」に属する学習だというメッセージです。本文には根拠が明確に書かれていないが、このような味わい方も可能だということを提案してある問題だと考えてください。

②情報処理の国語

いわゆる「受験国語」と表現できます。国語の読解問題において、課題文の前に必ず「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」というような表現が、書かれています。これは、「本文に書いてあることだけを根拠にして問題にあたりなさい」、あるいは「本文に根拠を見いだせない問いは決して出しません」というメッセージであると理解すればよいと思います(次の項目でもう一度整理して説明します)。ここで注意すべきことは書かれていないのに「きっとこういうことだろう」「確かこのようなことが書いてあったはずだ」と曖昧に想像力を広げて設問にあたってはならないということです。受験問題を解く上で必要なのは「書かれてあることのみを手がかりにして、聞かれていることのみで答える」ことです。正確な情報処理能力が求められているのです。そうすると上記①の力が十分に備わっている方にとって、実は受験問題において求められていることは「浅い」内容にとどまっていると気づき、物足りなく思えるかもしれません。しかし、そもそも言語とは、書いてあることを正確に読み、それを手がかりに情報処理するという一面がなければなりません。

「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」

確かに「書」、つまり書かれたものは全てを語りきつてはいないのですが、情報処理にあたっては、やはり「書」を情報の全てと考えておきたいものです。まず、「相手(作問者)が求めているものを、求められているだけ提供する」という、情報処理に徹した答え方が大切なのだということを意識しましょう。グノーブルでは、中3のカリキュラムからこの要素を取り入れ始め、高校では情報処理に徹する国語力、すなわち受験に直結した国語力の養成に努めていきます。

以下、「情報処理の国語」について述べます。

3 「情報処理の国語」を学ぶ上で意識したいこと

さて、では改めて実際にどう学べば良いか、考えてみます。

前の項目にも挙げた内容で、また、過去、誰もが見たことのある表現でしょうが、

「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」

国語の読解問題冒頭に必ず書かれているものです。実は、国語の学習で必要なことの全てが、実はここに示されていると思います。表現の前半と後半に分けてその意味を考えてみたいと思います。

・「次の文章を読み」

つまり、正確な「文章理解力」です。

決して「次の文章を読まないで」と書かれることはありません(当然です)。よって、文章内容を正確に理解することが前提となります。

この部分でつまづいてしまう原因（つまり何をしなければならないのか）

①語彙力の不足。

②物事についての常識・背景を理解が蓄積されていない。

③文法が定着していない。（古典分野のみ）

以上の3点について力をつけねばなりません。①と②は実感がわきづらい項目ですが一つ一つ積み上げましょう。①の充実のために必要なのはやはり質の高い活字(言語)に触れる量ということになります。②は非常に重要です。「論点の把握」とも表現できますが、評論系の文章を読むときに、論点を知っていること、つまり、現在どのようなことについてどのような意見があるのかは理解を積み重ねておきたいものです。受験における評論文は時事的な内容を踏まえた文章も目立ちます。日々のニュース等に興味を持つという考えも必要です。③について重要なのはコツコツと「やらない」ことだと考えます。時間を区切って一気に全容をつかみ、定着のために実際の文章に触れながらチェックを繰り返し定着を図る、という形式をお勧めしています。文法学習のみコツコツやっていたのでは、正直無味乾燥なつまらない学習に陥ってしまいます。あくまで実際の文章に触れていき、現段階で何が足りないか、何をすればよいかをチェックしながら学習を進めたいものです。

まず読んでみる



よくわからなくて困る



何を参照すればよいか、何を調べれば解決するかわかる



反復する中で定着する

幼児に対していきなり補助輪無しで自転車に乗るのを強要するような乱暴な提案に見えるかもしれませんが、未知の文章を読む上での心構えも養成でき、受験問題に対するときにも役立つと考えます。

・「後の問いに答えなさい」

つまり正確な解答能力です（高校の現代文授業において、記述問題では、解答の「構成能力」と表現しています）。

問いに答えなくてもよいという出題はあり得ません（当然です）。かならず、求められていることに答えなければなりません。実際にテストにおいて国語ができるということの核心部分はこちらです。与えられた文字情報（つまり文章）を正確につかむこと、つまり「次の文章を読み」に対応する部分では、文章の「執筆者との対話」が求められています。しかし、この段階で求められているのは「他の人物との対話」です。すなわち「作問者との対話」そして「採点者との対話」です。よって、作問者が何を求めているかは当然ながら問題文を正確に読めばわかるのです。そこから作問者が示したサインを見抜くことも大切です。たとえば文章中の傍線部について「どういうことか」と聞かれていたらそれは単なる傍線部の解釈でしょう。情報处理的に本文の適切な箇所をチェックしたうえで傍線部を分析的に解釈、換言していけばいいことになります。しかし「どういうことと考えられるか」と表現してあったら、「本文にそのまま答となる内容は書いていないですよ」と伝えたいのだ、と考えるべきでしょう。良問では高精度でメッセージが示されているものです。見落とさないようにして取り組

みましょう。

設問にあたる時常に意識したいことは

①設問趣旨を的確につかむ。

*本文から手がかりを十分に拾う。

②記述問題のためにも表現力を充実させる。

特に、設問趣旨の把握と、手がかりを拾うプロセスを重視したいものです。「次の文章を読み後の問いに答えなさい」と書いてあるのだから、文章中から手がかりが見つからないことはあり得ないのだと考えて取り組みましょう。

ここまで、意識していただきたいことを述べてきましたが、実際には苦勞している方が多いのも事実です。

授業中に生徒たちと触れる中で気づいてきた、苦勞している生徒のタイプを2つあげてみましょう。

① 代入型

特に古文に多いのですが、学んだことをそのままあてはめているだけのタイプです。「点」で読んでいて、「線」すなわち文脈から手がかりを拾って運用する力が養われていない方です。一例を挙げると、古文単語「聞こゆ」には様々な意味がありますが、出てきたらとにかく「申し上げる」と訳してしまうようなタイプです。他の部分に敬語が出てきていないのだから、ここだけ敬語が用いられるわけではない、という全体から手がかりを見つけて考察する「視野」を養成してほしいと考えてアドバイスに努めています。

② ミステリアス型（免罪符型）

「やっても無駄」「やっても伸びない科目だ」と位置づけるタイプ。そうすると努力しなくても良いことになってしまいます。たしかに、特に現代文はすぐに実感がわきづらい科目でしょうが、やっても伸びない科目だったら、そもそもテストに出すべきではありません。芸術的な素養のようなものを求める科目ではないと考えておきたいものです。そもそも国語がテストの科目となっているのは、採点できる要素、得点化できる要素があるからです。つまり、情報处理的な要素があるのです。いいわけを作らずに取り組んでほしいと切に願います。

過去の生徒さんから考えるに、実際、大学受験において全教科が万全の状態の本番に臨む方はきわめて少数だと思います。そうすると手があまりまわらない科目が出てきてしまうものです。特に理系に進む方はそれが国語となる場合も多いでしょうが、特にセンター試験のような情報処理に徹する形式の問題に触れると、ミステリアスでやっても無駄な科目だという言い訳はできないと気づくでしょう。ある程度真摯に取り組むことは必要です。やって報われるから受験科目にあるのです。

とにかく、ただ漠然と「活字に多く触れて読解力を養いましょう」というようなアドバイスは、自分の学力向上が実感しづらく、学ぶ必然性も感じづらくなると思いますので極力言わないようにしています。授業においては、「なぜできなかったか、わかる」「何が分からないか、わかる」「何を調べれば解決するか、わかる」ということを各自に意識してもらい、今後の課題を明確化していただけるように努めています。

授業でお会いする方については、添削などを通してどの部分が不足しているのかを

なるべく具体的にアドバイスするようにしていますし、それが使命だと考えます。この姿勢は堅持します。

*以下は事務的な連絡なので常体で記します。

4 スケジュール

総論として、大学受験を念頭に置くと、現実的に考えて高3の段階で国語に手が回らないであろうというのが大前提である。よって、まず中学時代に、文章を読む力、すなわち「次の文章を読み」に対応できる力の充実を目指すことを提案している。そして、高1で古文を読む力を定着させ、高2で現代文における解答能力を養成して、高3をむかえる、というスケジュールが理想だと考え、その前提に立ってスケジュールを提案している。

①中2～3

古文

未知の古文を読み解くために必要な力（文法力、背景の理解、単語力）のつけ方を具体的に提案し、今後の学習を円滑にできるようにする。文法分野は大学受験に必要な内容を一通り終える（中2前半）。ただ「何をすれば解決するかわかる」「調べればわかる」状態をこの時点でのゴールと考えるので、今後、記憶の徹底、適切な運用のため演習を重ねる必要はある。その充実を目指すため演習を繰り返す機会が中3で、「大鏡」「源氏物語」などを題材に未知の文章を自力で読み解くことができるための力を養っていただけるように努めている。

現代文

まだ「受験国語」に特化しなくてもよい時期と考えている。中2後半は明治時代から昭和半ばまでに活躍した文学者について、その背景を学び、なぜそのような文学がこの世に生まれ、受け入れられていったかを流れの中でつかむことを提案し、今後の読書力に活かしてもらいたいという内容。その後扱う題材も、夏目漱石「こころ」など、中学生レベルとしては難易度の高いものばかりとなるが、このような学習をじっくりできることが一貫校に通うメリットではと考え、あえて進学塾ながら徹底的に扱っている。なお、余談ながら、過去この授業を前向きにエンjoyしてくれた生徒の受験結果は極めて良好である。

さらに中3では、中島敦「山月記」、芥川龍之介の「舞踏会」、森鷗外の「舞姫」などの作品を読み、「情緒の国語学習」を楽しみながら、同時に「情報処理の国語力」も充実していただけるように努めている。

②高校

前述した内容であるが繰り返すと、当塾に通っていただいている方を、過去に担当させていただいた方も加えて考えると、圧倒的に国公立大を目指す方が多い。そうすると、高3では国語にじっくりと時間を費やすことは現実として難しい方が多いということになる。そこで、高1から高2までの間に、国語という科目について学習法を

確立してほしいと考えている。

古文

基本的な文法事項を学び、さらに演習の中で定着するには1年間と決めて集中的に学んでいくことを提案している。特に理系の方は高3時点で基礎から学ぶ余裕はないと思われる。原則高1で全体像を把握できていて、あとは単語力を充実させながら受験問題にふれて得点力を養うことのみで上の学年にあがってほしいと思っている。

なお、上記の「中2～3」に示したようにグノーブルでも中学時代に一通り学習して高校生を迎えることになる。これは、一貫校のスケジュールとも言えるので、高校受験を経て高校に進学した方にとって、追いつくためには高1時点の学習が極めて重要だと思う。過去、高1で、レベル分けしたクラスの上位を担当した経験があるが、8～9割程度は高校受験を経ていない一貫校の方だった。

いずれにしても、スケジュール的に言うと高1で古文をしっかりやっておくというのは理にかなっていると確信している。

現代文

得点力の充実に特化した授業を行っている。ここでは例として選択肢問題について述べてみる。授業で、以下の手順を徹底できるようにと提案している。

- ①設問趣旨をつかみ、
- ②正答に至るための手がかりを探し、
- ③どういう答が正答として提示されうるかある程度メド立てをし、
- ④各選択肢の要素を吟味し、
- ⑤先入観を入れず無難なものを選び、
- ⑥見直す。

記述問題については、上記の①～②は同様であり、そのあと適切にまとめて行くことができているかを各自の作成答案を添削しながらアドバイスするようにしている。いずれの形式においても、「正確な言語的情報処理能力の確立」を目指している。